

---

# 夢詩壺

磯崎愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢詩壺

### 【Nコード】

N7534Z

### 【作者名】

磯崎愛

### 【あらすじ】

【全年齢・現代恋愛ファンタジー小説・自サイトで完結済作品を微妙に改稿して転載】

30代独身OL深町姫香は古道具屋「時任洞」の常連だ。

店には読書好きの獺がいて、どんな夢でも見ることができるという「壺」を売っていた。

その壺をあずかってから姫香は奇妙な夢を見るようになり……！？  
本と夢を巡る恋愛ファンタジー！。

ほぼ毎日更新しております

## <1>（前書き）

### 【登場人物】

ふかまち ひめか  
深町 姫香

本編主人公。30代独身OL。読書と絵を描くのが好き。

ときとう ばく  
時任 獏

古美術・古道具屋「時任洞」の雇われオーナー。読書好き。本業は「夢売り」。正体は、謎。

あさくら さとし  
浅倉 悟志

姫香の大学時代の後輩、アサクラ君。臨時の「時任洞」パートタイム店長で、本業は輸入レコード店店長。

ミズキ（みずき）

浅倉悟志の友人にして雇い人の美青年。輸入レコード店社長で、元クラブDJ。本名は秘密。

さかい とくじ  
酒井 徳次

酒井晃の大叔父。源氏物語の桃園式部卿になった夢を見る。

さかい あきひ  
酒井 晃

姫香の元カレ。

< 1 >

失敗した。

こんな日にかぎってピンヒールのブーツ履いてきちゃったよ。

二十二半の靴の踵が落ちるほど狭い、手すりのついた急な階段を見あげていったん立ちどまり、カラオケボックスの派手な蛍光看板をちらりと横目にし、気合を入れてカバンを肩にかけなおす。

左手には本の入った紙袋の持ち手が食いこんでいる。

目指すは「時任洞」。古美術・古道具屋だ。

一階に大衆居酒屋、二階にカラオケ、三階には現代アート画廊というエレベーターもない雑居ビル最上階の四階にそれはある。

「こんばんは」

入り口にかかる藍染の暖簾をおしあげて見えるのは、正面に陣取る階段箆笥だ。

その上にそれぞれ、紫座布団に座った金色の招き猫、マサカリ担いだ金太郎さん、ガラスケースに入った博多人形が置かれている。

これだけ頭身の違うものを同じ高さだというだけで並べられる店主のセンスがすごい。

長方形の室内はせりあがった左奥半分に畳がしいてあり、和箆笥や鏡台やその他さまざまな家具や雑貨がひろがっている。床には露店のごときまとまりのなさで、ひびの入った七輪やごろんとした臼が転がっていた。

右奥正面にはカウンター代わりのテーブルがあり、手前だけヴェトナム風の染付け皿や手提げ籠、箸置きやキャンドルやこまごまと雑貨がのっている。

その後ろ、仕切りの向こうが事務所だ。

まったくもう、お客がきたのに出てきやしない。

古美術の部分はどうも、うそくさい。作り付けの棚には箱書きのついた萩茶碗もあるけれど、さっぱりよいものと思えない。その隣

に安手のお題茶碗がばらばらと並べてあるのが艶消しなのだ。じゃあ何が目当てかという焼き桐の箆笥におさまった古裂とアンティーク着物だ。

なにを隠そうこれにはまって二年ばかり、月一ペースで通っている。

初釜におよばれたあと、「茶道具セール」の看板につられたのがはじまりだ。

これで店主が眼鏡の似あう美青年だったなら、私だってもっと頻繁に来ることだろう。ところが、鳩時計のかけられた仕切りの奥にいるのは、美青年どころか人間でもない。

まあ、ありていにいって、いやもうこのさいはつきりいうけれど、そこにいるのは真正正銘の獏なのだ。

夢枕獏じゃないよ。彼なら、即刻『キマイラ』の続きを懇願する。

「あら、いらつしやい」

ようやく目の前にあらわれたのはおよそ体長二メートル、熱帯地方にいて夢を食べるという奇蹄目バク科の獏。

ただし、動物園にいる獏ほど泥っぽくない。

いま特別な洗剤で洗ったばかりというくらいつるピカの、白黒の巨大なマレー獏がのっそりと長い顔をあげていた。

「さつきからずっと、誰に話しかけてるの？」

生意気に、こんなデカブツなのにめちやくちゃ可愛い声で話すのだ。

「読者だよ」

「それ、いないと思うよ？」

チチチ、私は舌をならして人差し指をふる。

< 2 >

「いないかどうか確かめる手段は私達にはないの。シュレディングの猫といっしょでね」

「なにそれ、トリビア？」

「ちがうよ。読者が本を開いて読み始めるまでその中身がどんなものなのか、ほんとうのところは誰にも確かめようのないものなの。書評とか帯の文句に騙されちゃだめよ。本の中身はそのひと自身の一回ごとの体験で、けっして同じように繰り返されることのない、再現不可能な貴重な体験をいうの。」

本というのは本来、そういうもの」

「そうかなあ」

獺が長い口吻を左右にふる。ちよつと、象に似てる。そのまま、よつこいしょ、と近くの丸椅子に腰掛けた。

いつも不思議なんだけど、座れるんだよね。

その姿をとつくりと眺めながら問いかける。

「読書がいったい何に似ているか、考えたことがある？」

「なにつて」

「人生」

「はあ〜？」

今、半目になったよ。獺のくせに！

「信じてないな」

「だ〜つて〜」

獺は大きな身をよじって上目遣いで私を見た。

「アタマ悪いひとに見えるから語尾をのばすなって言ってるでしょ」

「でもお、じつさいあたし、バクだし」

「そこは馬鹿だよ、バ、カ」

「やだ〜、あたしバクだからあ、ウマシカだけは言われたくないのに、ひつどお〜い」

猿は二足立ちになって長い頤したに両前脚をもつてきて、頭を左右にゆるゆるとふつてみせる。

これはもう、わざとやっているのだ。

ひねこびた三十代独身OL（昨今では負け犬というらしい）には何があっても真似できない荒業だ。

もっとも大昔の美少女アイドルと違って、ふんわりカールした髪が揺れたりしないからだただ不気味なだけなんだけどね。

「それで、今日の呼び出しはなに？」

付き合いきれないといった顔をして、さつさとビジネスモードに切り替えた。

月末の呼び出しは珍しい。なにか出物でもあったのかしら。

友達が吉祥寺でやっている古着屋さんにここの布地や小物を卸している。

月に儲けは映画一本分もないアルバイトだ。去年一年の収支でいうと有田の鶴首（代金二万円）さえ回収できていない。

でもまあ、自分の選んだ布地がお洋服や可愛い小物になって買われていくのはうれしいものだ。だから飽きもせずじぶんの買い物だけでなくちゃんとこりずに買い付けもする。

猿もすぐそうした私の気持ちを知り、黒檀のテーブルにのつた小さな壺を口吻でさししめした。人間でいえば、あごでしゃくつたというところだろうか。

「これが？」

いつものアルバイトじゃないと気づいて眉をひそめた。

これは商売のほうだ。

つまり猿の本業、夢売りの仕事。

「むし壺よ。あたしの商売道具。売り物ね」

「ムシ壺？」

どんな夢でも見られるそうだけど、なんだかそれはひどく淫らな気がして丁重にお断り申し上げていた。だって、そんなのなんだかいやらしいじゃない？

「安くしとくわよ。でも、転売はしないでね。人死にが出るといけないから」

「そんな物騒な代物じゃないよ」

聞きなれない言葉を耳にして怖気て口にすると、獺はさらりこたえた。

「貴女なら平気。というより、それを持つてるとあたしも引き摺られていきそうだから、貴女を信用して預けたいの」

信用なんて言葉がとび出すとは驚きだ。これは、困ったな。すぐそばの藁張りの椅子に腰をおろす。

「何かあつた？」

正攻法で問いただと獺はふつと皮肉っぽく笑う。獺も笑う。犬が笑うよりはずっと人間らしく。

「ちかごろじゃ、目に見えるものしか信じてないひとが多くなって商売あがったりなのよ。雇われオーナーは辛いわ。ここのお家賃払うのも一苦勞よ」

時代劇なら、こめかみに膏藥をはった女将が煙管から紫煙をはいて空いている手ではんぼんと肩をたたきそうな素振りだった。

年末に自分へのご褒美がわりに買った南部鉄瓶の代金三万円の支払いがまだだったことを思い出し、あわててお財布をとり出した。

「今日は一万円もってきたんだけど、来月のお給料日には二万円払うから」

一万円札を受け取りながら獺が呆れたようにいった。

「それじゃ月賦の意味ないじゃない」

「月賦って、懐かしいひびきだね」

獺はそれから、先ほどとはかわって可愛らしく笑ってから口にした。

「うつし世は夢 夜の夢こそまこと」

「乱歩」

「ご名答。もっていつて」

獺が壺を右脚でこちらのほうにすすめた。

私達は本読み友達なのだ。お互いに本を貸し借りしてああだこうだいう仲で、たまに、こういう遊びをする。

タイトルと作者名だったり名台詞や冒頭文だったり。

マイクル・クライトンの『ジュラシック・パーク』をわたすとキアラン・カーソンの『琥珀捕り』が返ってきて、ジュール・ヴェルヌの『海底二万里』と『八十日間世界一周』を「ご主人様と下僕萌え小説」だから腐女子視点で読んでみてと貸すと、ピエールが主人公のエドワールに頑固にムツシューって呼び続けるパスカル・キニヤールの『シャンボールの階段』のほうが「萌え」じゃない、などと押しつけられたりしてお互いに好き勝手に盛り上がり、おバかな読みをしあつてゆうゆうと遊べたのだ。

けれど今回はちよつと、趣旨が違ふんじゃないのかな。

「いくら？」

これが純然たる「売り物」だと知っている私はまっとうに値段をたずねた。けれど、

「今のが代金替わり。それから、あたしはしばらく店を空けるから」  
問いかけに、ひらりと身をかわすようなさりげなさでこたえられてしまった。あいかわらず、草食動物らしくない身のこなしだ。動物園でみたバクって生き物は、もっと鈍重なかんじだったけどなあ。  
「旅行でもいくの？」

ぼんやりと、獺が踊り子号に乗って伊豆の温泉に入ったりするところを思い浮かべていた。JRのSuicaのペンギンには負けるけど、絵的にはすごく可愛いと思う。それなのに、そうした私のゆるるな想像に水をさすかのようなこたえが返ってきた。

「まさか。ちよっと身を隠してるのよ」

身を隠す、ですって？ なにそれ、すごく怪しいじゃない。

「このせい？」

壺に触れるのがいやな感じがしてたずねるとその問いかけを無視して、鉄瓶の分の領収書いる、などときいてきた。ごまかされたようだけど、自宅用だからいらないとこたえて、拝見スタイルでテーブルに手をつきうつ伏せるようにして壺を見た。

とくにこれといって変わった様子もない、素焼きの壺のようだ。

珍しいのは蓋が茶壺のように和紙の反古紙でしっかり封をされていることだ。

でも、よく見ると、なんというか匂いがない。

モノにはその所在を示す気配みたいなものが当然あるはずなのに、それが見えない。景色がない。文字通り釉の有無じゃなくて、本来ならあつてしかるべきそのものもつ「背景」がないのだ。

遺跡から出てきて考古学博物館に記号番号付で納められててもお

かしくないし南仏でリボンをかけられポプリを入れて売られても変じゃない。

自慢するけど、物を見るのは慣れてるの。私は絵をかくひとだから。

顔をあげて振り返ると、後ろから獺がいった。

「今までとモノが違うのよ。なかに銀河系まるまる入ってるって言われても驚かないくらい異質なの」

「それ、とってもアヤシイ感じよ？」

じぶんでも、ちょっとだけ声の上擦ったような気がした。

「あのね、怪しいものが怖くなったらおしまいよ。だいたい、しゃべる獺がいる店に長居できるんだから今さらでしょ」

「命は惜しいわ」

一瞬の間のあとに、獺がけじめをつけた。

「そうね。じゃあ、一月たったら返してもらっ。たぶん、その頃にはこっちもどうにかなってると思うから。じゃあ今その封を切って」  
「待って。使わない」

「それは、無理よ」

獺が、心底呆れたような顔でいった。

「無理でも何でも、私は夢を買わないから」

「封を開けないなら、夢をコントロールできないわ」

コントロール？

夢くらい、無意識でもなんでもわけのわからない何かに任すよ。だってそんな、夢なんてものまでも、じぶんの自由にしたいなんて私には到底しんじられない振る舞いだ。

そう思ったのが通じたのか、獺が器用に肩をすくめた。

「変わってるわね。夢くらい自分の自由にしたいっていうひとが多いのに」

「私はイヤなの」

思ったよりずつときつい調子になってしまいうつむいた。夢売りは獺の本業なのに、それを私は全面的に否定してしまっている。

獺がまだ何か言いたそうなそぶりを見せたので、

「とにかく、預かるから。任せて」

そう、強引に言い切って壺を紙袋にしまい、わざと話題を変えた。申し訳ないけど、嫌な雰囲気のままではいたくなかった。

「それよりこれ、すごく面白かった」

久世光彦のかいた『一九三四年冬―乱歩』。

カバンの仕切りポケットから角が折れないように紙袋に包んで入れてきた文庫本をとりだした。

久世さんの本はそこはかとなない色気が素敵だ。そして乱歩でさえ愉しんで読み耽りそうな作中話『梔子姫』がたまらない。

「貴女が好きそうだと思ったのよ」

うんうんと何度も深くうなずくと、獺はちよつと自慢げに微笑んで本を受け取った。私はその笑顔がとても嬉しくて、不思議にそれがじぶんの手柄でもあるかのような気持ちになりながらお礼をいう。「いつも、どうもありがとう」

「こちらこそ」

獺が深々と頭をさげた。私も踵をそろえ手を重ねて頭をさげた。下でいったん止まり、それからゆっくりと上半身をあげた。

お辞儀のコツは、下げる速度より上げるときやや遅くすること。貴女のお辞儀は見応えがするとウケてくれて以来、獺にはなおざりにしないことをしている。そんなことくらいで獺が喜んでくれるならいくらでもする。

そして獺が紙袋の中身に視線をくれておもむろに問う。

「今日のブツはなに？」

その問いに、ダン・シモンズの『ハイペリオン』シリーズを掲げてみせた。

文庫落ちするまで待つて大人買い。単行本は全四巻二段組みぎつしりの分厚い凶器本。枕になるどころのはなしじゃないくらいの重さである。文庫にして全8巻の超長編になる。

あまりに大部で気軽にすすめられないのが難だけど、これがまた本当にものすごく面白いんだ。そして本好きの獺ならばどんなに長かるうが面白ければ大丈夫と喜び勇んで運んできた。これ、全部となると文庫本だってそうとう重いだよ。

「なんで貴女の持ってくる小説はいつもそう長いわけ？」

「だって、長いほうが好きなんだもん」

わたしは悪びれずにそう言いかえす。

「こないだ『神曲』を読まされたばかりなのに。その前も五冊続きのSFで」

「『銀河ヒッチハイク・ガイド』。でも、面白かったっていったじやない」

「それは否定しないけどお」

西欧の古典中の古典、ダンテの『神曲』はSFだろ、というのが私達ふたりの見解だ。

それにしても、美女は早死にせねばならぬというフィクションにおける掟は、かのダンテ・アリギエーリ様の嘘偽りない厳しい現実から始まったわけじゃないだろうけど、解せない。

世界中の神話伝説の類はどうしてみんな、女が冥界にくだっちゃうのかなあ。

男が死んで、女だけ助かるっていうんじゃないのかしら。

映画『タイタニック』はその点、えらかったかも。

かといって、愛する女性を守るために死にます、とかいうのも興醒めなのだ。

さいしょから戦うなよ、といたい。

「じゃあ、次にくるときはアルフォンス・ドーデかモーパッサンの短編集もってくる。こないだ読み返したら心洗われるような気持ちになっただね」

「新刊はないの？ 小説はノベルっていうくらいだから新しくなくっちゃ」

ハートマークがつきそうな勢いでうきうきと宣言されても困る。

獺のいうことはもっともだけどそうそう買ってはられないし、新

刊なら必ず新奇かっていうとそんなこともないじゃん。

「さいきん、本屋さんには寄らないの」

お金を貯めて『ボッティチェッリ全作品集（六万四千円税別）』を買おうと思ってるから近づかない。行けば、色んな本が欲しくなるんだもん。いくらお金があつたつて足りないよ。

美術書でいいのなら、と私が口を開きかけると、

「あんまり専門的なのはやめて。貴女の話聞いたほうが面白いから」

釘をさされた。

『ダ・ヴィンチ・コード』を読んだあと、獏が小説的に美味しい、ヴェルヌはもちろん、ウンベルト・エーコの『フーコーの振り子』、またはコリン・ウィルソンの『賢者の石』という方面にすすむかと思えば陰謀史観やクトゥルフ物はもうけっこうと美術史へと意欲をみせた。

ではと意気込み、仕切りなおしてレオナルドが登場する小説を列挙した。

そのまま西洋絵画オタクとしては『ダ・ヴィンチ・コード』の謎解きよろしく、プッサンの絵を見て、ぜひともフランスアカデミーの成立起源まで辿りたかったのだ。

しかしながら、私の「計画」の前に大きな壁がたちふさがる。

そもそも「ネオ・プラトニズムってなに」というのだ。

それを説明しろといわれると、どこからどう話せばいいかわからない。西欧思想史のなかでもかなり特異な立ち位置にあるはずのものだし、わたしは重要だと思うけどたぶん、わかりやすい概説本の類はそんなに出ていない。

ぱっとわかりやすいといえば、「プラトニック・ラブ」という言葉が生まれた思想だ。

でも、本来は、「精神的恋愛」って意味とは違うんだよね。

それはともかく、そのことばのもととなる哲学者プラトン全集は拾い読みだし、キリスト教会会議の歴史やら教会分裂、コンスタンティノープル陥落など、私の手に負えなかった。

負えないから、フランスの碩学アンドレ・シャステルの『ルネサンス精神の深層——フィチーノと芸術』という本を貸したのに、読んだらかえってわからなくなったらしい。

なんでギリシャ人のプラトンとキリスト教が一緒になるのっていう至極真つ当な質問に、私は猿を納得させられるようにこたえられなかった。

もちろん、百科事典やらウィキペディアあたりにのってることをちゃんと述べたつもりだったんだけど、全然、通じなかった。

まあそうだよな。

自分でも正直、ナゾだなあって思ってるんだもん。

歴史的な経緯や事実はおえるけど、本当の意味でのナゼってわからないよね。

だからしょうがなくて、ボッティチェッリの《春》と《ヴィーナスの誕生》、それから『神曲』の挿絵について、ネオ・プラトニズムの影響があるんじゃないかって思われることを語ってきかせたら、妙に感心された。

すごくウケタのだ。

「私の話でいいの？」

「貴女の話だから面白いんじゃない」

真顔で口にはされると、正直、照れる。こういうのを面映い、というのかもしれない。だって、ほっぺが熱くなる。

獺が本の表紙を見ながらいった。

「……ほんと、小説じゃなくて絵のことが話したかったんじゃないの？」

返答に困り、うつむいている獺の長い顔をじつと見た。

「あたしも、貴女みたいに絵をかけるとよかったんだけどねえ」

「かけばいいじゃん」

かるくいなすと、獺はひどくおおげさに首をふった。

「だめだめ。まったく、ぜんぜん、絵心つてものがないからダメ」

そこまでいわれてしまうと返す言葉がない。だから話をもとにもどした。

「でもさ、絵について語るなんて無謀だと思わない？」

すると獺が胸をはるようにしてこたえた。

「それをいうなら、そもそもなにかについて語るってこと自体、無謀というか野望じゃないの？」

野望といわれると、ちょっとかつこいい。

ただ一枚の絵を理解するのにさえ人類史を知ることなしには不可能と感ずるようになった、と『薔薇のイコノロジー』で書いた若桑みどり先生の言葉くらい、私を納得させ、怯えさせ、鼓舞する言葉はない。

それはすごく正直な、うそのない、掛け値なしの真実の告白だと思う。

読書中になかなか、そういう声を聞けるものじゃない。

みんな、わかったようなことを言いたがるものだ。

昔から、「物語る」ということが気になる。

それはもっぱら文字のことじゃなくて視覚芸術についてのほうだけど、絵に「おはなし」がどうやってかかっているのかが気になる。場所、時系列、登場人物の姿かたち、動き、感情表現、などなど。なにかを読みたくなくなってしまいうるか、読まされているというか……。

絵のなかにかかっている「おはなし」を理解しようとする本を読まないとならない。

けれど逆に、いったん絵として流通してしまった「おはなし」がまた今度、「おはなし」そのものに立ち返っていく。

そういう連鎖の輪に触れてしまうと、いくら本を読んでも絵をみても、まだまだ足りないと思うってしまう。

理解なんて不可能だとわかっていても、やめられない。  
とまらない。

「話の前提条件として、獏と私が《同じ本》を読んだってことはまあいちおう信用できるじゃない？」

本は印刷技術のおかげでとりあえず落丁本みたいなものを抜いては、今現在は信用できるテキストがあるような気がするっていうか「

「写本だと、写し間違いなんかありそうね」

「そう。一応、流通してる本の場合は版を確認できれば、とりあえず《同じ》ものを見ているっていう信頼感がある。

けど絵はね、現物にあたる以外、本当にもう、どうしようもないの。フレスコ画なんかまず簡単に動かせないし、とりはずしてもダメなのよ。その場所に行つて見ないとわからないことがあるから。

なにより、人間の目くらい信用のおけないものはないもの」

「バルトルシャイティス？」

深く、ふかく、何度もうなずいた。

『アベラシオン 形態を巡る四つの伝説』。錯視、目の迷いのこと。今まで貸した美術書関係で獺にいちばん評判がよかったのがユルギス・バルトルシャイティスだ。澁澤龍彦の偏愛する、リトアニア生まれの美術史家。フランスの美術史の重鎮アンリ・フォションの娘婿で、中世ロマネスク美術を万華鏡のように見せてくれる面白い研究者だ。その人生はなんだか不思議に満ちていて、獺が、誰かこのひとのことを小説に書けばいいのに、とまで言っていた。

ほんとにね。

それからまた、紅茶を飲みながらこの一月の間に読んだ本の話をして八時をまわったところで獺から遠慮がちに声がかかった。

閉店時間だ。

私はよほど、驚いた顔をしたらしい。

「ごめんなさい。悪いわね」

ひどく申し訳なさそうに、獺が謝った。

帰りをうながされたことは今まで一度もなかった。

前は十一時になると、ふたりきりで話し続けていたんだから。

「代わりの人のために色々整理しとかないとならないのね」

そりゃあそうだ。

私も謝った。でも、さっきみたいに嫌な感じにはならなかった。

お互い仕事のある大人だし、そういう了解がちゃんとあった。

ソーサーのない半端もののノリタケとウェッジウッドのカップをそのままにして立ち上がる。

獺はほんとに自分でなんでもやりたいひと。

自分がお客さんの場合の「そのままでもいいから」の見分け方はなかなか難しい。

洗い物はすみからすみまで自分でしたいタイプなのか他人に任せても平気なのか、こまめにしたいのかまとめてさあと腕まくりしてやるタイプなのか、拭いてちゃんと棚に収めないと気がすまないのか洗い籠に置いて乾燥するのを待つほうなのかとか。

まあでも、獺と私がそういうことに一々緊張してしまう時間はとうに過ぎている。

獺は紅い飲み物が好き。私は白い飲み物が好き。

紅茶は絶対ストレートという獺と、ワインは白だよ絶対という私と、それでお互い楽しくやっている。

別れはいつも通り。扉まで、獺が見送ってくれる。

手をふって、またねという。

またね。

じゃあ、またね。

扉をふさぐくらい大きな獏が、何故だかすごく頼りなく見えた。薄っぺらく、揺らいでいた。それは獏がバクに見えると口にした時以来の、奇妙な見え方だ。

あれは出会ってから一年もすぎたころ、私達はもうすっかりお客と店主というより読書仲間になっていた。

アンドレ・マルローの『風狂王国』を貸したあとイタロ・カルヴィーノの『マルコ・ポーロの 見えない都市』が返ってきて、澁澤好きだという獏に『高丘親王航海記』を枕に、おそろおそろ切り出した。

その瞬間、獏の巨体がひらたく潰れてこの世界に刻み込まれたように感じた。

輪郭線が際立って、白黒の陰影がそこにあらわれた。

それこそルネサンス時代の天才彫刻家ドナテッロの浅浮き彫りみたいだった。

実際はほんのわずかしが高低差がない彫りなのにびっくりするくらい奥行きが出現して、獏が遠いところにいるのかすぐ近くのかわからなくなった。

目を凝らしてそれを眺めていると、獏は、なんで今まで黙ってるわけ、もう一年もたってるのに、今頃いわなくてもいいじゃない、と甲高い声でこちらを責めた。

私はなんといつていいかわからなくて、バルトルシャイティスの『幻想の中世』をさしだした。

獺は表紙を見てすぐ表情を変えた。ついでに元に戻っていた。

あ、これ読みたかったのあ、といってそそくさと受け取った。

無言のまま様子をうかがっていたら、さすがにばつが悪かったらしく、そういう秘密を打ち明けるときはもうちよつと気をつかつてよ、とうつぶいた。

こちらが謝る番なのかと微妙に納得がいかないような気がしながらも謝罪した。

あやまつたら、意外と気持ちが落ち着いた。

やっぱり私が悪かったかもしれないと反省したところで、獺が吐息をついた。

ごめんね。びっくりしたの。ほんと、ごめんね。

そう、かわいらしい小さな声がいった。大きな獺が、すごく小さく見えた。

私は本当に悪いことをしたと思い、もう二度と獺を驚かせないようになしようと誓った。

本当はいろいろ聞きたいこともあったし（なにしろしゃべる獺だもの）、ひとりになると疑問が胸に渦巻くことばかりだったけれど（気が狂ったかとか、妖怪か宇宙人かとか）、それは無理やりに押し込めた。

初めて会ったときからいつも獺は本を読んでいた。

あるときなんの気なしに、それ面白いですかと尋ねたところ、よかつたら貸しますよ、と言われたのがダンセイ二卿の『最後の夢の物語』だった。

夢、か。

獺を守りたかったから壺を受け取ったくせに、軽くなったはずの

紙袋が妙に重く感じて足をとめた。本を貸してもらえなかったことに気がついたのは、二階と三階の踊り場まで来たときだった。

下から足音が聞こえたので立ち止まると、看板を抱えた小柄な男のひとに、すみません、どうぞ、と逆に譲られた。

一度だけのぞいたことがある三階の画廊のひとだ。上の時任洞によく来るんですよと話したことがあるのに、こちらを覚えていないようだった。

あのとき、このひとは獺を時任さんと呼んでいたから知り合いつてことだ。

獺についてきいてみたくなった。

喉元まで出かかった言葉の気配を察してか、そのひとは立ち止まったままの私を不思議そうに見あげた。

私はうまくことばを見つけられなくて、質問をのみこんでごまかした。

「あ、すみません。さようなら」

「あ、どうもありがとうございます。さようなら、お氣をつけて」  
自分でもこわいくらいの早足でその横をすりぬけて、階段をかけおりた。

きつと、変なお客だと思われたにちがいない。

私は壺のはいつた紙袋を胸に抱えるように持ち直し、自分でも呆れるほど大きなため息をついてそこを後にした。

「夜の夢こそまこと」とは、よく言ったものだと思いながら。

二月一日

二月の巴里の寂しさを、寒さを、その侘しさを君は想像できるだろうか……。

小さく吐息をついてペンを置き、海を隔てたはるか遠くの東京に残してきた恋人、鏡子を思う。

常によく見る夢ながら、その夢のなかの鏡子は美しい。

ある冬のパーティー的一幕。

彼女は踊り場に集う人の群れに紛れ、こちらに背を向けて立っている。雪よりも白い背中をみせた真紅のドレス。まるで人魚姫のような美しいそれを彼女は堂々と着こなしている。

僕には彼らの話す言葉も室内楽のゆるやかな旋律もなにも、聞こえていない。僕に聞こえるのはただ、鏡子の声だけ。

その軽やかな、子供のようにはた悪戯っぽい、鳩の鳴き声に似た、喉奥でくぐもらせる独特の笑い声だけが僕の耳をうち、この心臓を高鳴らせる。

鏡子が大理石でできた階段の手すりにやわらかく、まるで触れることをためらうようなそぶりて手をのせ、僕がそこに到着した気配に気づいて身をくねらせて顔をかたむける。

すると、高窓に嵌められたステンドグラスを通して降りそそぐ陽光が、彼女のうえに明るく艶やかで不思議な文様を描く。その魔術の儀式めいた不思議な光景に見蕩れ、僕は息せき切って階段をかけあがる。ところが、急に足下が崩れ、奈落の淵に落とされて夢はそこで終わってしまう。

落ちた衝撃に肩を揺らして目をさませば、僕は独り、凍えそうに寒い冬の夜に置き去りにされ、足が無様に震えて引き攣っているというわけだ。

ああ、鏡子。

鏡子、誰よりも恋しいひと。愛しい僕の恋人。美しいひと。君に会いたい。

こんなさびしいところに来るのではなかった。ましてたった独りでなんて。

どうか手紙をください。このままでは凍えそうです。愛しています。

最後に、小さく書き足しておいた。

（二月十四日）

鏡子から、まだ返事は来ない。

今日はなんでも異教のお祭りのひとつで、恋人同士が互いに贈り物をしあう日だそうだ。あいにく持ち合わせが少なく、本場のクチュリエで鏡子に何かを拵えてやることはできない。

とはいえ、僕は鏡子の恋人で画家の卵だ。

僕にできることは、愛しいひとの絵姿をかいて贈り物として届けることくらいだろう。

ところが、どうしたことか、画帳にむかってもこの左手はほんのすこしと思うようには動かなかった。

察するに、彼女の美しさを描きとることの困難を、いま僕はしみじみと心ゆくままに味わっているのかもしれない。

僕のただひとりの恋人であり、美神でもある鏡子。会いたい。

< 1 2 >

く二月十五日く

まだ絵はかけない。あまりにも寒く、今日はカフェでシヨコラを飲む。身体が温まる。

く二月十七日く

おかしい。先月からもうずっと手紙が来ない。何かあったのだろうか。

鏡子に限って心変わりなどないとは思うが、鏡子は美しい、心配だ。

く二月十九日く

いくど描いても、鏡子の顔に似ていない。あの愛らしさ、コケッとな魅力、そういったものが少しも描けていない。

才能のなさを思い知る。  
悔しい。

く二月二十一日く

記憶というのは不思議なもので、胸に確かに刻みつけたと思うもののほど危ういものはなく、正直なところ、僕はもうまったく彼女の顔を思い描けなかった。

いやしくも画家を目指してこの街に来たというのに、なんということだろう！

そのかわりといつてはなんだが、鏡子の着ていたドレスの襟を飾るカメオの女性の横顔、そのなんともいえず優美なあごの線や、彼女の手にしていたオルゴールの蓋に刻まれた薔薇の花弁のようすや、はたまた紅茶を飲むために用意された角砂糖をのせる銀のスプウンの柄にある英国風の獅子の紋章——そうしたものは今も手にとって見なくともはつきりと思い出し、それをためしに画帳のうえに描き写すことができるのだった。

それだけでなく、シャンデリアのしたで揺れるダイヤモンドの耳飾りの煌めき、彼女の手をつつむ子羊の革でできた響しい手袋のステッチが描く曲線、黒銀の狐のやわらかく豪華なマフの手触り、巴里のクチュリエ仕立てのドレスととももの生地 of 絹の靴を飾るリボンの光沢、そうしたものも描き出すことができた。

初めて会ったときに着ていた、扇面を華麗にあしらった紫縮緬の大振袖。刺繍された桜模様の半襟。胸高に締めた帯と紅い扱き。洋風の、がま口のついたビーズのバッグ。蒔絵の髪飾りの模様は流水で、房のついた薄い桃色のビロードのショールを肩にかけていたはずだ。僕の画帳には今、物ばかりが幾つも幾つも拡げられている。まるで、鏡子の衣装箆笥がそのままこの紙のなかに納まっているみたいだ！

それなのに、鏡子。

鏡子の姿がどうしても思い出せない。

背は低かっただろうか、高かっただろうか。色は白かっただろうか、それとも日に焼けていただろうか。

おかしい。

僕はたしかに鏡子の婚約者だったはずだ。

手紙が来ない。

愛想をつかされたのだろうか。

僕が勝手に旅に出てしまったから。

鏡子、会いたい。

「二月二十三……ちょっとおと、待った！」

私はベッドから飛び起きた。

「なんだこれ！？　だめでしょ、これじゃ。こんな変な夢ばかり見させられたら気が狂うつ。こんなのぜんぜん望んでないって、私は画家じゃなくて、深町姫香なんだってば！」

これで二十日間以上、この調子だ。

しょうがない。ちかくのファミレスにでも逃げよう。寝てしまおうと起こしてくれるファミレスしか、行き場はない。

今日という今日は眠ったら狂い死ぬ。

徹夜は三十の大病をこえるとキツイというのに、なにが貴女なら平気、だよ？

嘔吐きめ。封を開けてないのに、いや、開けてないからか、ん？ 私ってば開けてない場合の話を聞いてなかったじゃん。

それにしても、こんなものやっぱり受け取るんじゃないかった。

こんなものつき返して……って、でも、そしたら獺はどうなるの

？

ダメだめ！ 返しちゃダメ。

でも、じゃあどうすればいいんだろう？

その夕方、請求書の切手を貼りながらゆっくりと考えた。

今日は来客も少なくて週末なのにバタバタしないですんだ。

応接室においてのお客様は今夜宿泊予定で金沢からお越しのお取引先様だから、このまま接待先に車をまわせればいい手筈。

飲む前にあんまりお腹をたばたぼにしまつては申し訳ないからお茶を差し替える必要はなし。お店に連絡は入れてあるしタクシーは外に出ればすぐ拾えるし、お土産の手配もしてあるし問題ない。企画御提案書もさつき全部、もれなくお渡し済み。

応接室のお片づけ&お掃除は、週明けでいいや。ガラステーブルは手垢がつくからクリーナーで拭かないとならないけど、マメな社員が多いとはいえさすがにそこまでやってくれない。早くテーブル買い換えてほしい。

今の勤めは、小さなコンサルタント会社だ。

コンサルOLというのは一度やってみたい憧れの職種だと思っていたのだが、実情はただの零細企業の事務員さんだった。

京都の創業三百年をこす老舗呉服問屋の次男坊である社長が外資系製薬会社を辞めて呉服屋さんをお客様にして始めた会社で、女性社員は私しかないって言っただけでそのこぢんまりさがわかるかしら？

今朝は早く出社したから余裕があった。

本当は昨日までに出したかった請求書をようやく終わらせられてほっとする。

だって五組も打ち合わせのお客様がこられて伝票入力なんてして時間はなかったんだもの。

世の中には二十日締めというのが存在して、なぜかそれは十日や月末締めよりすこしだけ偉そうで、月末にすべてを締めるとき同様の緊張をこちらに強いるのだ。

でも、請求書をつくるのは支払い書をつくるよりなんとなくうれしい。こういうのをゲンキンというのかも。これで世の中がうまく回るといえる気がする。

そうだ。

やっぱり絶対に返すのはダメだ。

でも、話しくらいもつとちゃんと聞かないといけない。取扱説明書くらいもらっておかなきゃ。大人なんだから。

タイムカードの表示は五時五十一分だ。早く来た甲斐があった。角のポストの集配がくるのが五十五分。間に合うね。切手を貼った請求書の束をもって、さあ、これをポストに入れてから行くわよ。

「いらつしゃい」

時任洞の暖簾をくぐると、男のひとの声がした。ぎくつとして立ち止まると、そのひとはスポーツ新聞から顔をあげてこちらを指さした。

「深町センパイ？」

「アサクラ君？」

どうして、という言葉が双方からもれた。それから、ふたりして笑いあつた。

「北海道にいるんじゃないの？」

「そんなの、卒業してすぐのことつすよ」

「じゃあ、ずっと東京だったの？」

「まあとにかく座つて、お茶でもどうですか。まずお客さんにお茶を出せていわれてたんで」

そうか。今、彼はここのアルバイト（パートか？）なのだ。

それにしても、猥も嵩高くておかしかったけど、長髪に革ジャン、スキニーなブラックジーンズに鉾付ベルトと全身カラスのように黒いアサクラ君も、この空間にはミスマッチすぎる。

でも、妙になこんでるけどね。

あいかわらず、足、ほっそいなあ。隣立つのいやだったんだよねえ。

茶托を忘れて仕切りの奥に取りに戻る後姿だけ見ると、あの頃とそう変わらない。

ぎよろつとした大きな目は昔どおりで、ちょっと頬がこけた気がするせいか前よりもさらに濃い系だ。

あの髪の長さだとりあえず前の仕事もサラリーマンじゃあないなと検討をつける。

さて、ひとさまの見かけを判断するということは相手も同じよう

にしているってことだ。

「アサクラ君、ということ、君もここでひとくさり、ぶちかましてくれていいよ」

「センパイ？」

「遠慮はいらないから。老けたでも、まだ結婚してないのかなでも、かまわないからね」

「いえ、あの、オレはですねえ」

「頁数すくないから、言わないんなら本題にはいっちゃうよ」

「はあ、望むところです」

望まれたようなので、続けよう。

いや、待った。

これだけは最低限、確認しておかないとならないことがある。

「アサクラ君は、バ……時任さんを知ってるの？」

「オレ、オーナーも前の人も直接会ったことないんすよ。このバイトも友達からの紹介で」

ということは、獏がバクだと知らずにいて、ましてや夢売りだとも知らないと思ったほうがいい。

「そう。じゃあ、まあいいや。ところで、アサクラ君は今までどうしてたの？」

そこで彼はきゆうに立ちあがる。

「センパイ、夕飯まだでしょ？ 寿司とるんで、いっしょに食べてきませんか。さっき景気付けに友達からビール半ダース貰ったし」

「なに、いきなり。贅沢ねえ」

そういうと、彼は派手な割引券をひらひらと指の間で揺らした。

「どこでもらったの、それ？」

「ポストに入ってたんですよ。期限今日までなんで使っちゃおうと思って。給料日前だけどたまにはオレが奢っちゃいますよ」

変わらないなあ、と笑う。

すると彼は受話器を肩にはさんで振り返り、十年ちょっとじゃそうそう人間変わりませんって、とこたえた。

深町姫香。

一目でわかった。

そして、相手も自分のことを覚えていてくれたことが心底うれしかった。

出会ったきっかけは学園祭だ。

入部してすぐ、実行委員として各部活ひとりずつスケープゴートのように新入生がかりだされる。軽音楽部だった浅倉は部長の酒井に命じられて委員になり、くじ引きで施設管理局長の深町の下に配属された。

もともと中庭の舞台で演奏する軽音楽部は自分たちの使い勝手のためにこのポジションを取りたかつたらしい。くじ引きから戻ってくるなり酒井にほめられたものだが、浅倉はもうその時にはこれから学園祭までずっと女の下でこき使われると思うと憂鬱な気分だった。

今までの経験上、役員をやるような女は口やかましくてろくな奴はいない。

何も好きこのんで面倒な役目を引き受けるなんて奇特なやつだとそう思っていた。

週一回、水曜日の昼休みを準備のための会議にとられること自体面倒でたまらなかった。決まりきった規則の確認や連絡と報告に費やす時間に嫌気がさしそうな予感がした。

施設管理局（正式には施設設備品管理局）にはもうひとり二年生の男がいた。

管弦楽部の龍村功といって、黒ぶち眼鏡をかけた眉の短い吊り目の小太りの男で、一目で話が合わなさそうだと浅倉は決めつけた。

深町が体育会本部役員と打ち合わせのため、妙に甲高い早口でしゃべる龍村から仕事のあらましを聞くことになった。

対面で座り書類をはさんで説明がすむうちに、性格は合わなさそうだが要領はいいと理解した。これなら初めに心配していたほど嫌な仕事にはならないだろうとほっとした。

すぐあとでわかったのだが、龍村は一年次からこの仕事をしていた。

三年生で茶道部長の深町がこの四月から立候補で本部役員になったため、局長は辞退したらしい。やな女、とまでは思わなかったが意外な感じがした。

二年生の局長は他にもいたし、まさか大学で年功序列はないだろう。

この場合、その逆か。わからんと思い、浅倉はすぐにそれを忘れた。

ともかく、龍村のいうことを聞いておけば間違いない。

体育会の男と話す深町の背中中は小さくて、先生の説明を受ける生真面目な中学生のように見えた。

最初の会議が終わって、浅倉は各部から回収した提出書類を深町の机においた。すぐさま部室に引き上げて、新曲の練習をしたかった。黙って置いた書類を、深町はどうもありがとうと言ってもちあげて角をそろえた。

そして一枚とって、左手をあげた。

「待つて、アサクラ君」

「はい？」

ポケットに手をつ突っ込んだまま踵を返してふりかえる。

彼女の着たメタリックブルーの本部役員用ジャンパーの左肩には「深町」と漢字で書いてある。そのときまで、浅倉は彼女の下の名前を一度も耳にしたことがなかったことにさえ気がつかなかった。

「悪いけどこの書類、もう一度部長の酒井くんに持ってって書きかえてもらってくれるかな。部室、戻るんでしょ？」

浅倉は椅子に座ったままの彼女のハート型の顔を見おろした。そのときには顔は好みなのだと、とうに気づいていた。

「時間が長すぎるの。いくら要望の段階でもこれはちよつと非常識すぎる」

希望使用時間は去年と同じ、午後四時から花火のあがる直前までのロングラン。ただし、事実上はその後も音は出し続けてダンパに流れ込む。それがもう伝統のようになっていた。浅倉はだからただ事実をのみ告げた。まさか慣例が崩れるとは思ってもみなかったのだ。

「でもこれ、毎年オレら軽音がオーラスなんですよ」

「うん。知ってる。でも、龍村くんとも話したんだけど、今年から公平を期して順番はくじ引きにしようかと思ってるの。どこの部活だって長く、いい時間帯に演奏したいものでしょ？」

いつもは講堂で発表する部活も交えて、一度ちゃんと希望をきいてからやったほうがいいと思うの。サークルと同好会のひとたちもそう言ってるし体育会の局長も賛成してくれたしね」

「や、でも、それは」

浅倉は慌てて反論しようところみたが、深町はそれを一顧だにせずなんでもないような顔つきで書類をさしだしてきた。

「とりあえずコレもって、施設管理局長の深町がそう言っていましたって、言いについてみて。自分の部活だからぎやくにやり辛いと思

うけど」

そこまでわかっていてどうして、という気持ちが顔に出たのだろう。深町は彼の顔を見あげて口にした。

「アサクラ君、まずは当たり前前の正論でいってみるの。しかも、下のひとから伝言って形でね。さいしょから私が出てくとお互い引っ込みつかないでしょ？ 後がないんだから。お願いね」

とびきりの笑顔できちんと両手でさしだされ、浅倉はわけもわからずにその書類を受け取ってしまった。お仕着せのジャンパーが大きすぎ、指先以外ほとんど隠れていたことまで覚えている。

その後の顛末はどうでもいい。今となつては、たかが学園祭の舞台のことがなんであんなに大事だったのかよくわからない。

けっきょく彼は学園祭でもバンドでもなく、深町姫香に夢中になっていた。

彼女は会議の席で質問にこたえるのにこれ以上ないくらいテキパキと流れるように話していたかと思うと、施設管理室に戻ったとたん、時間が押してんだから何度も説明させるなよ、説明書ちゃんと読め！ と叫ぶほどめっばう口が悪かった。

けれども、あとで聞きに来たひとには自分の昼休みがなくなるのも気にせず懇切丁寧に説明をした。編集局員のくせに施設管理室に入り浸る茶道部の後輩の来須美奈子が心配して、サンドイッチを買いに走ることもあったくらいだ。

常にマイペースの龍村でさえ、深町がヤルと言ったことには、また無理ばっかいつてどうなつても知りませんよ、と口にしながらも従っていた。

浅倉は、いちど素直にいうことをきいてしまったせいか使われっぱなしだった。

あのちよつと先の尖つた、いかにも脆そうな三角形の頭にいいように振り回された。バイト先の中華屋の店長も部長の酒井も人使いが荒いと思っていたが、深町も堂々、負けていなかった。

彼女の命令で混沌としていた施設管理室の備品はきちんと一個一個にラベルが貼られて整理整頓され、作業スペースさえ設けられた。今まで会議室を利用していた文化会編集局はそこで発行紙を綴じるようになり、何故かは知らないが深町はもちろん浅倉や龍村も手伝わされた。

わら半紙を折って畳んでまとめてホツチキスで留める作業の間、各自順番に好きな音楽をかけていいことになりCDやカセットを持ち寄った。

そこでわかつたのだが、ふたりの音楽の趣味は一部かぶっていた。三年前の同じ日に、武道館で右手の拳を突き上げていたことまで打ち明けあうと、彼はすでに運命を確信していた。

カラオケでスティーブン・タイラーの物真似をした浅倉を、ほとんど尊敬の目で見あげていた深町。ロックスターがギターを弾くのは女の子にもてたいためだという真実を、浅倉は思い知ったところだった。

告白は、花火の打ちあがる瞬間に決めた。

どこの学校にもあたりまえに存在し、うそかほんとかわからない迷信ながら強固に信じられている伝説があるものだ。その時その場所で告白したカップルは、というやつ。

バカだったのだ。

浅倉は自分のことをつねにバカだと思っていたはずだが、そのときの自分ほど愚かなヤツはこの世にいまいと今は思う。

充分に予想できて然るべきことだが、学園祭当日の実行委員くらい忙しい者はいない。

しかも施設管理局の最大の仕事は撤収にこそある。花火なんて見るヒマはない。

トランシーバーを持たされながら昼は警備で混雑の整理をし、夕方からは立て看板を崩しテントをたたみゴミを集め、中庭の舞台を壊し始めた瞬間に、花火があがった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7534z/>

---

夢詩壺

2012年1月8日17時45分発行